

氏名	TUTATCHIKOVA ELENA
ヨミガナ	トゥタチコヴァ エレーナ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第623号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 『歩行、思考と想像力—アートプラクティスとしてのフィールドワーク』 〈作品〉 Along The Path, We Walk（道とともに、私たちは歩く） 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	古川 聖
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	多摩美術大学	教授	（美術学部）	港 千尋
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私たちはなぜ歩くのか。歩くときにどう世界を観るか。歩くことは人間にとってどんな意味を持つか。様々な土地での滞在制作が活動のベースとなってきたこの数年の間、これらのことについて考え続け、本論文において答えを出すように努めた。

人間は、世界を想像し、歩き、世界の道を作りながら、思考する生き物である。見たことがない場所、まだ知らないことの向こう側へ向けた想像力が旅の動機となったとき、実際に歩き、旅することにより人間は知識と経験を得る。私たちは意識と身体の間があるからこそ、経験が成立している。意識か身体のものかのみで、人間としての経験を得ることは不可能だろう。経験を積み重ねていくことで私たちは、確実にこの世の中に生きている感覚を得ることができるだろう。

人間にとって「道を作る」ことは何を意味するだろう。まだ地図化されていない場所だけでなく、すでに存在している都市や町の中でも、私たちは新しい道を構築している。それは、新しい道や道路を物理的に作ることに限らない。歩くことは世界の中の境界線を作り、地図を更新し続ける行為だ。歩くプロセスの中で私たちの認識が変化していくために、歩行が行われる場所を持つ意味も変わっていく。個人の歩行の経験は、コミュニティーに影響を与え、外側、つまり土地にも現れる。本論文において、意識と身体による経験、経験と歩行について、オーストラリアのアボリジニが持つ「ソングライン」— 人間と神々を繋ぐ世界の道作りのネットワークや、「ストーリー」— 建築家、研究者やアーティストによる、歩行の実践によって都市空間をリサーチするイタリアのコレクティブの活動を元に分析を行った。

アーティストは、物理的に風景を変容させなくても、人の風景認識を変えることで見え方を変え、見えなかったものを見えるようにする能力を持つ人だ。どんなメディアを選択しても、アーティストは、ポイエーシス、つまり、なかったものを創造し、見えなかったものを見えるようにするという本来の意味での詩人を目指さなければいけない。そのために歩行は、最も有効な手段の一つではないか。歩行は様々な形態を持つのだが、どの形態でも必ず意識のトランスフォーメーションを意味する。

自身の制作過程において、歩行の位置付けについて、写真や映像、言葉やドローイングと並ぶ表現の一つとして扱い、またそれらの表現形式を繋ぐものであると考える。土地のフィールドワークを行うとき、歩行はその土地を考えるために必要不可欠な作業だ。

アーティストが行うフィールドワークとは、人間の活動の一つとして、歩行といった能動的な作業によって土地を知ること、そして人間との関わりを通して土地を巡る想像力や物語創造を探る作業だ。自身の活動におけるフィールドワークの対象となるフィールドとは、ある特定の場所ではなく、また、土地や文化における現象というより、人間がどのように世界を観る、聴く、つまりどのように世界を知るか、そして、それをどのように表現するか、ということである。つまり、外側の風景が内側に写る「認識」の領域が、フィールドである。人間の内側にあるフィールドを探検するために、私は外部の世界での経験を求めて、土地に出かけるのだ。自身が歩きながらその場所を観察し、人と関わり、人がどのように世界を見るかを探り、それを表現するように志す。また、土地の人々とともに歩く機会を作ることによって、彼らはその土地へ向けた思考をより意識的に日々の生活の中に取り入れるきっかけを作るように努める。

本論文において分析する、ハミッシュ・フルトン、フランシス・アリスやヴェルナー・ヘルツォークなどの作家の作品や活動は、歩行をテーマにしたものばかりではない。しかし、これらの作家の作品において歩行は重要な作業あるいはモチーフやキーワードであり、その制作自体も歩くことなしでは不可能だだろう。私は自身の活動や作品制作においても、歩行は、歩くことそれ自体がテーマであるのではないが、思考、想像、経験、作品制作、メディア、人間関係、土地との関係など、それら全てを繋ぐ作業として捉える。歩くことを意識的に日々のプラクティスに取り入れることで、メディアの新たな可能性や、アーティストとして、人間としてその土地や社会に対してできることを探し出そうと努めている。

歩行は、様々な分野の人や、地域の人にとって互いに関わる機会を与えてくれる。歩きながら人間は、人間として生きること、その土地、その空間をより深く知る。また、フィールドワークをベースにした芸術の中で、アートは文化人類学に近づいていくだけでなく、より人の生活や土地の中に入り込んでいくものになるだろう。アーティストがこのような身体的かつ知的な世界との関わり方を通じ、アカデミックな知識や、従来の芸術の表現方法、日常生活を、一つの活動の中で統合させることは、私たちが生きるこの時代にとって必要なことではないか。

アーティストだけでなく、全ての人間は本来、想像し思考し、世界に新たな意味を与え、なかったものを存在させ、見えなかったものを見えるように変化させる能力を持つ。また、その能力を発動させるのは、どの時代においても歩行ではないだろうか。現代社会の中だけでなく、普遍的な意味で人間であることはどうということか。歩きながら、それについて考え続けていきたい。

(論文審査結果の要旨)

本論文においてエレナ・トゥタッチコワは和歌山県の熊野、インド、とりわけ北海道の知床半島を中心とする、長年にわたるフィールドワーク、制作滞在などを通して得られた経験、知見をもとに思索や実践を重ね、歩行という行為、アートプラクティスとしてのフィールドワークが持つ、現代におけるアспект、その未来へむけた新たな視座の可能性を示した。まず、現代美術のコンテクストの中で、歩行を表現行為として扱うハミッシュ・フルトン、リチャード・ロング、フランシス・アリス、ヴェルナー・ヘルツォークのなどの作品、活動の分析を行い、さらに歩行と風景との関係性を、言語の問題から論じ、論を自分の制作、活動と関係付けながら、行為、作品、空間と人間にまで広げ論じた。

本論文特質は、学者や哲学者ではなくアーティストにより、歩行と表現、歩行と物語の関係性が調査、研究され、とりわけ女性アーティストによって言語化が試みられている点にある。先行の「アートとしての歩行」の実践例のほとんどが男性のアーティストが一人で行ったものであるの対し、トゥタッチコワはそこに「共にあるく」という視点を新たに加え、彼女のフィールドワークでの実体験から、「人間は完全に一人で歩くことは不可能である」と結論づけている。そして歩行は私たちの環境、文化、生活を守り支えるエコロジーであり、あたらしいテクノロジーによって変貌していく私たちの社会への抵抗であるとしている。

このようにトゥタッチコワの論文はフィールドワークを行った場所の自然、環境、そこで出会い活動した人たちとの関係性の中で生まれ、その現場での実践に裏打ちされた確かさをもち、その事が論考に血肉があたえており、説得力あるものになっている。論文の全体の構成やバランスは整理され、考えぬかれた優秀なものである。以上の理由から、本論文は学位授与に値すると認め、合格とする。

(作品審査結果の要旨)

エレナ・トゥタッチコワの論文『歩行、思考と想像力-アートプラクティスとしてのフィールドワーク』は、創作活動に与える歩行の重要性について述べたものである。歩くことによって土地の自然やそこに生きる人々に触れ、そこから新たな経験や思考が生まれるプロセスを「世界を生きること」ととらえ、芸術表現における歩行の実践に注目しながらハミッシュ・フルトン、フランシス・アリス、ヴェルナー・ヘルツォークらの作品を参照する。さらに歩くことによって人類が獲得してきた「風景」について、オーストラリアの先住民アボリジニにおける地図（ソングライン）等を例に挙げながら考察し、自らが実践するフィールドワークやワークショップの経験について論を進めた上で、人間と世界を繋ぐ行為としての歩行の重要性へと結論する。

修了作品「Along the Path, We Walk/道とともに、私たちは歩く」では、北海道・知床で制作した作品「ひつじの時刻、北風、晴れ」、知床半島に辿り着くまでに様々なパターンで描かれる海上の地図を想像しながら流氷を見つめた「Drift Ice: Minehama」、歩行の姿として雪の中の足跡をとらえた「Winter Paths」等のシリーズで展示構成が行われた。エレナは2014年から知床に通い、映像や写真撮影、ウォーキングツアーやワークショップを行ってきた。そこで出会う風景の絶えない変化や、さまざまな人々との交流を通して得た創意は写真、文章、ドローイング、映像、音と様々なメディアを用いて表現されているが、それぞれの表現形式に固執することなく、それらが互に関係し合いながら、作品としてのひとつの流れを手に入れている。それは制作の様々な段階で、その都度、歩行という方法論に立ち還ることで、新たな経験の出会いをかけたえのないものとして受け止める制作姿勢が可能とするものである。移動による変化や、そこで立ち上がる意識の揺らぎは、プロセスそのものを手に入れて語らなければ成り立たない。目的を設定し、そのために効率的な手段の選別や計画実行に心を奪われると作品の完成度ばかりが顕在化するが、エレナの制作姿勢はそうではなく、歩行移動において得られる変化を注意深く観察し、そのプロセス自体を作家の身体的経験として作品化している。歩行という原初的な営みに注目し、人間が世界の変化と同期することから潜在的なものを表す方法論を確実に自らのものにしており、高く評価できる。

(総合審査結果の要旨)

ロシアからの留学生であるエレナ・トゥタッチコワは、博士後期課程進学後、写真集『林檎が木から落ちる時、音が生まれる』（2016）の刊行や個展「With My Dinosaurs」（2017）の開催、北海道知床でのプロジェクト「道は半島をゆく」（2018）など多くの成果を発表してきた。

その活動の総決算とも言うべき博士論文「歩行、思考と想像力 アートプラクティスとしてのフィールドワーク」は、人間が歩くという身体行為を通し、移動しながら自己を解体し、世界を再構築してゆく実践に関する研究である。

歩く行為により人はどのような新たな知と美を見だし、移動のプロセスは認識や創造とどんな関係にあるのか。さらには歩行を思考と捉え、それらを表現と見なすことは可能なのか。そうした問題が様々な視点から論じられる。

ジグモント・フロイトが「思考することは歩くことに似ている」と言ったように、作家にとって歩くこと

は思想であり、その思考の足跡が道となってゆく。そうした思考の営みが、ヴェルナー・ヘルツォークの『氷上旅日記』の行程、ハミッシュ・フルトンやリチャード・ロングらランドアーティストの身振り、フランシス・アリスの街路の行為などの実例を通し、思考のエコロジー（生態学）として分析されている。

博士作品「道とともに私たちは歩く」は、歩くことにより想像力を広げ、思考をアート形式として実現してゆく可能性を探るインスタレーションである。

作家にとって歩行や移動は、写真、映像、音響、ドローイング、地図、テキスト、詩などと同様の固有表現であり、それはバラバラな断片を有機的に繋げてゆく『溶液』の役割も果たしている。

エレナはこれまで北海道知床や茨城太子町、京都鴨川等で地域住民や子供たちとフィールドワークやワークショップを繰り返し、多彩なプログラムを内包した共同創造を実践してきた。そうした成果を取り込み、近年の活動を新たな場として再構成し、経験の意味の重要性を呼び寄せようとしている。

博士論文、博士作品とも作家の思考と創造を的確に表したものであり、アートと文化人類学を結ぶ新たな糸口となりうると考える。以上の理由から博士号に値すると判断した。